

Title	日本石器時代における骨角製釣針の研究
Sub Title	Fishhooks made of bones and horns during Japan's Neolithic age
Author	江坂, 輝彌(Esaka, Teruya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1958
Jtitle	史学 Vol.31, No.1/2/3/4 (1958. 10) ,p.542- 586
JaLC DOI	
Abstract	It is interesting to note that large quantities of fishhooks made of the bones of wild land and water fowls, tusks of wild boars, and of the deer bones and horns of them have been uncovered from Jomon Period shell mounds found along the Pacific coast region north of Tokyo. In contrast to the above, only few examples of fishhooks made from bones and horns have been uncovered from shell mounds of the Late Middle Later Jomon Period as well as the Yayoi Period found in Okayama and Aichi Prefectures located west of Tokyo. Some two-piece bone fishhooks have also been found among the bone and horn fishhooks of the Early Jomon Period culture. These are thought to be related to the early Kam-Keramic culture of Northeast Asia. The bone and horn fishhooks of the Late Jomon Period culture appear most similar to those fishhooks found in the north Pacific coastal areas. This phenomenon should be given serious consideration in the study of the cultural movement of the north Pacific region.
Notes	慶應義塾創立百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19581000-0546">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19581000-0546</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

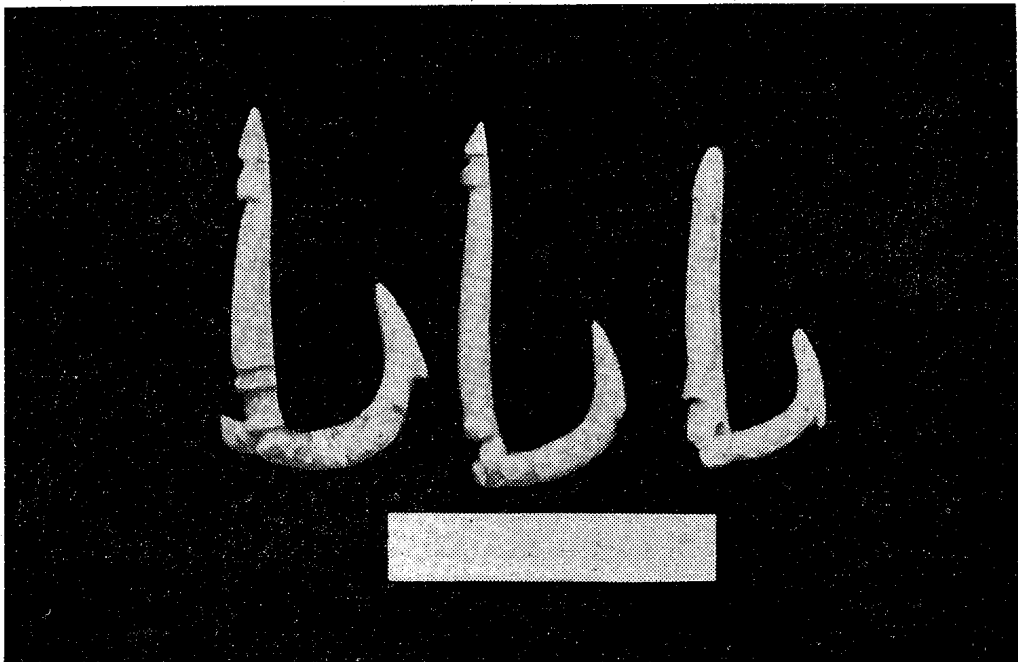
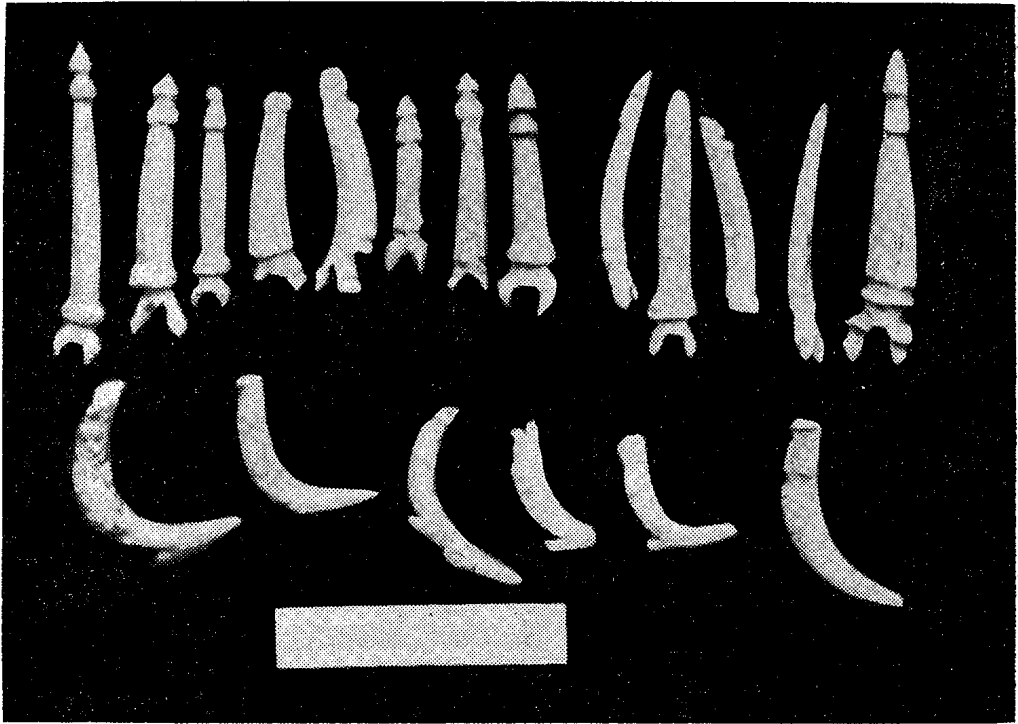
## 日本石器時代における骨角製釣針の研究

江 坂 輝 彌

わが國古代の漁具については既に岸上鎌吉博士<sup>(1)</sup>、長谷部言人博士<sup>(2)</sup>、清野謙次博士<sup>(3)</sup>、甲野勇氏<sup>(4)</sup>、羽原又吉氏<sup>(5)</sup>など先學諸賢の論考多數發表されており、種々卓抜なる高説が述べられてきているが、近年著しく資料も増加し、漁具の編年的研究にも飛躍的發展があつたので、諸先學の高説に對しても幾多の改訂をなすべき必要が生じてきたので、ここに筆者などが集積してきた新資料によつて、縄文文化時代から彌生文化に至る間の骨角製釣針の發展過程を考察してみたいと思つた次第である。

しかし資料が次第に増加したとは云うものの、現在までに知られただけの資料ではまだ不明確な點も多く、今後なお多くの補足改訂を必要とすると、考えるものである。

本稿を執筆にあたり種々資料を見せて下さり、本發表に資料を使うことを快諾された明治大學文學部考古學研究室の杉原莊介教授、芹澤長介講師、資源科學研究所の和島誠一氏、東京大學東洋文化研究所の佐藤達夫氏、早稻田大學文學部考古學研究室西村正衛助教授、金子浩昌氏、東京在住の桑山龍進氏、青森縣八戸市の泉山岩次郎氏、福島縣浪江町の檜野照武氏などに對し衷心感謝の意を表するものである。



福島縣磐城市寺脇貝塚發掘の結合釣針縄文文化晩期  
(檜野照武氏資料)

また貝塚出土の魚骨の種名判別の勞をとられた大給尹氏、直良信夫博士に對しても厚く謝意を表する次第である。

縄文文化時代からの骨角製漁具を本稿では釣針についてのみ記し、ヤス 猪・モリ 銛については後日稿を改めて記したいと思う。

## 本 論

骨角製の釣針に對しては甲野勇氏の論考などがあるが、未だ日本全域のものを編年的に考察したものは皆無のようである。

筆者は先年執筆した「考古學ノート2 縄文文化 第四章 3 漁具」の項で、その大要を記したのであつた。

過去においては「大形の物は古い時代に多く、小形品は時代が降らないと發生しない。縄文式文化の初期の頃に屬する釣針は、總て大形品に限られて居るが、これは當時の人間が、小形品を製作する技術を缺いて居た事を暗示すると同時に、其頃の釣は主として大魚に對してのみ行はれた事を物語るものであり」などと記されているが、今日新發見の資料が増加するに従つてこの見解は誤りであることが明らかになつた。

また長谷部博士は外鏝の發生起源を結合釣針であると考えられ、嘗つて史前學雜誌上に發表された『骨角器漫談』の中でも、『わが石器時代の釣針がかかる合成式より發達したことはこの小突起に該當すべき殆んど贅物に類する小突起を具うる釣針の多いので推定される』と記され、博士は釣針の最も原始形は尖部と軸とを別々に作り、此等は糸を以てし字狀に結び合せた結合釣針で、この接合部に於て尖部の尾端が外方に稍々突出する所が外鏝の祖原を爲するものである。と説かれたと甲野勇氏の「日本石器時代産釣針」に記されており、甲野氏は「此説が成立する爲めには先づ結合釣

針が普通の角製釣針に先行するものであると云ふ事を證明しなければならぬ。——中略——嘗つて長谷部博士によつて報告された東北産結合釣針の如きは、先生の慧眼によつて發見されたものであるが此等は主として後期に屬するものとみである。此種の釣針で前期に屬するものとしては、菊名貝塚から多少その疑いのある數例が出土して居る」と記されているが、二〇世紀の後半に入つて縄文文化早期前半の貝塚から、長さ三糎未満の小形釣針が出土することが判り、またこの時代に結合釣針の存在も確認されるに至つたので、前記先學の見解に對しては幾多の改訂が必要となつてきた。

研究の進捗と資料の充實によつて、常に過去の見解には改訂が要求されることは考古學研究の進展上、萬止むを得ぬことであり、これによつて先學の業績を傷付けるものではない。新資料の増加にともない改訂を要する點はあつても、諸先學の卓見の中には今もつて今後の研究の指針となるものもあり、本稿の末尾に註記した文献については、研究者は併せて一讀されることを望むものである。

縄文文化早期の結合釣針（組合せ釣針）は一九四九年、横須賀市若松町平坂貝塚から内鑿のある先端部が一點發掘され、一九五三年發刊の駿臺史學三號に岡本勇氏が同貝塚の調査報告を發表しているが、その文中で芹澤長介氏が同釣針は結合釣針らしいとの見解を示したことが記されている。<sup>(つて)</sup>（第一圖1參照）

この結合釣針の先端部は結合部が缺損しており、現存部は長さ四糎ほどあり、鹿角製である。

その後一九五六年、筆者が青森縣三戸郡大館村十日市小字赤御堂貝塚を發掘調査した際、纖維を含有しない縄文の施文された尖底土器と共に、第一圖2、3、に示したような、鹿角製と獸骨製の結合釣針の先端部を發掘、平坂貝塚發見

のものがこれと同形式のものであることが確認された。4、は内側に鑿が二つある鹿角製のもので、基部を缺いているが、2、3、と同形のものと考えられる。6、7、8、は基部の構造が前記のものと異なる結合釣針の尖端部である。前者を假りにA類、後者をB類として置こう。6は鹿角製、7、8は鳥の肢の管骨を割いて製作したものである。以上の6点はいずれも赤御堂貝塚發掘のもので、奥羽地方北部の縄文文化早期の時代のものである。

赤御堂貝塚からは、

- 1 スズキ
- 2 マダイ
- 3 ポラ
- 4 メバル
- 5 ヒラメ
- 6 カレイの類
- 7 イワシ
- 8 サバ
- 9 カツオ
- 10 ブリ
- 11 エイ

- 12 ウゴイ
- 13 カマス?
- 14 フゲ
- 15 クロダイ

以上十五種類の魚骨が判別され、他にまだ種の判別のつかぬものが数種類ある。以上の種類の魚は前記した結合釣針を使つて捕採したのもあるが、後記するエイの尾棘製の<sup>やす</sup>稽を使用して捕採したもの、イワシ ウゴイの如く網で主として捕採したと思われるものなどがある。赤御堂貝塚ではスズキ、マダイ、ブリ、サバ、イワシ、などの魚骨がことに多く出土した。

また赤御堂貝塚の北約五〇粍の距離にある青森縣上北郡六カ所村大字倉内字唐貝地貝塚においても、佐藤達夫氏がA類の結合釣針を縄文の施文された尖底土器と共に發掘している。(第一圖5)

以上類例が僅かであるが平坂、赤御堂、唐貝地の三貝塚から發見された結合釣針はいずれも先端部のみであり、赤御堂貝塚の如きは先端部のみは破損品も加えれば七例も出土しており、軸部の全く未發見であることは、軸部が鹿角や獸骨などで作られたものではなく、遺存しにくい木製品の如きものではなかつたかとの疑を抱かしめられるところである。

またA類とB類の相異は基部の軸との結着部の構造の相違のみでなく、A類が一乃至二の内鑿を有するが、B類は無鑿であり、A類に比して細身である。

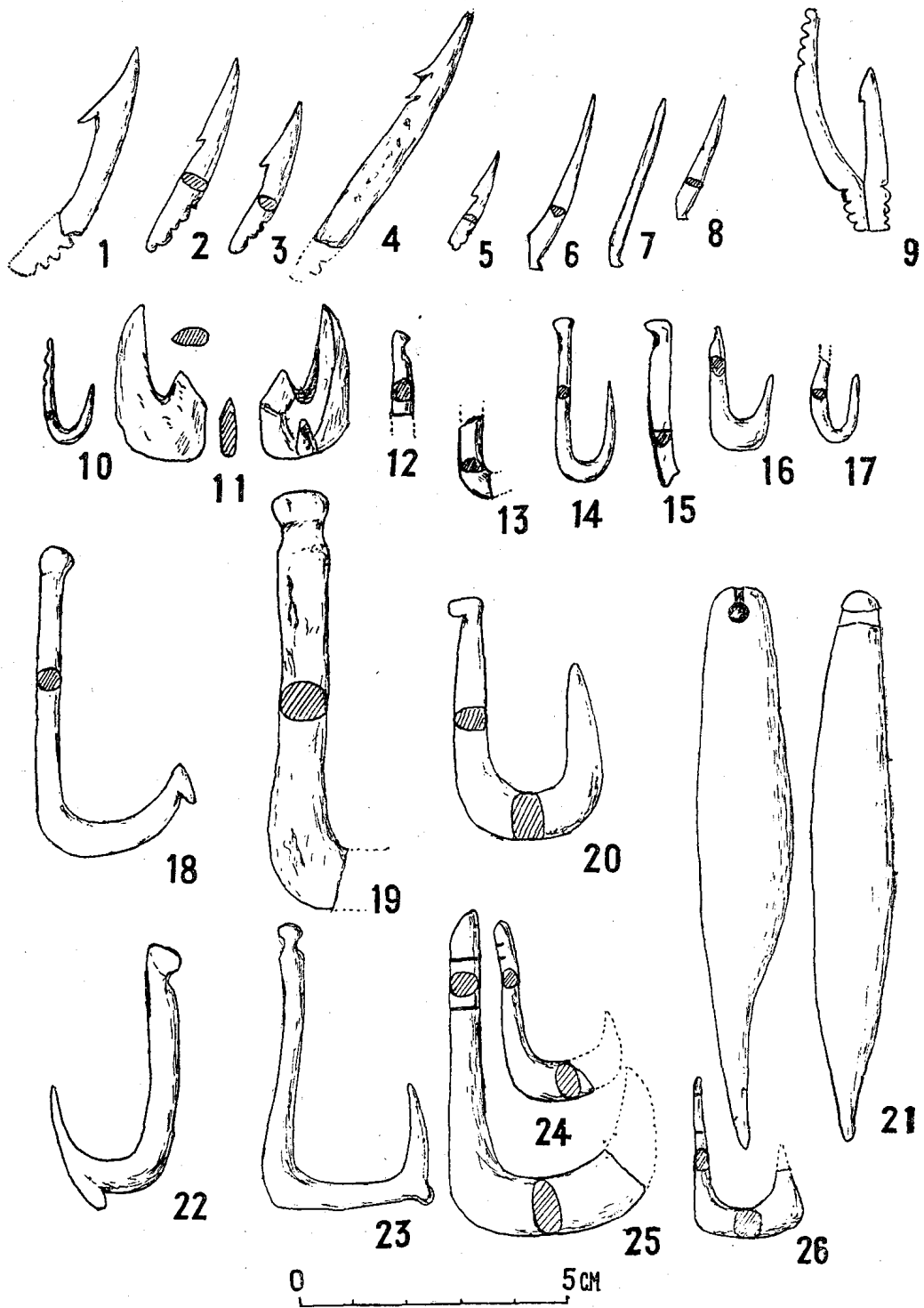
このように結合釣針が關東地方の繩文文化早期の平坂式土器に伴い、また奥羽北部で早期後半の土器に伴うと云う事實は全く最近の發掘調査によつて判明してきたところであり、このような發見のあつた今日においては長谷部博士の御高説の如くわが國においても普通の釣針に結合釣針が先行するとの考えも否定できなくなつたが、最近の發掘資料中には早期の貝塚出土の普通の釣針もかなりあり、しかも三纏未滿の小形品が多く、前記の甲野氏の見解は改訂を余儀なくされるに至つてゐる。

第一圖10は横須賀市夏島町貝塚の夏島式土器出土の貝層から一九五五年明治大學文學部考古學研究室で發掘調査を行つた際發掘されたもので、今日までに發見された繩文文化最古の釣針である、この釣針は猪の四肢骨製ではないかと思われ鏝はなく、長さ略二纏と云う小形品で、軸の頭部の背には三つのくびれがある。11は同じ文化層から發掘された猪の大腿骨を使つて製作途上にある釣針の未製品である。

第一圖12、13は夏島貝塚の田戸下層式土器出土の貝層から發掘された破片で鹿角製14、15は田戸上層式土器出土の貝層から發掘されたもので鹿角製と思われる。14も圖示の如く無鏝である。16、17は横濱市金澤區野島町貝塚か出土したもので、野島式土器に伴つたものであり、いづれも獸骨製の無鏝のものである。以上に示した先端部のある早期の四例は無鏝のものであり、今日までに私が見知した資料中では前記した結合釣針には内鏝のものがあつたが、この種の釣針には早期の遺跡發見品に未だ鏝のあるものの發見がないようである。

前期に入つての釣針は、横濱市港北區菊名町貝塚<sup>(10)</sup>、港北區日吉町下組貝塚<sup>(9)</sup>、茨城縣東茨城郡小川町大字小川字野中貝塚、青森縣八戸市是川小字一王寺貝塚<sup>(11)</sup>などの出土品が知られてゐる。





關東地方の前記三貝塚は前期初頭の花積下層式土器を出土の貝塚で、菊名貝塚 下組貝塚は魚骨の種類、出土量も大いので著名な貝塚で、前期の初頭、東京灣岸の奥深い入江にあつた比較的近接した兩貝塚の人々が、狩獵と共にさかんに漁撈を行い漁獲量も多かつたと云うことは、當時のこの地方の海岸地形、氣候環境が漁族の棲息に好適であつたためと云うことも考へられるが、横濱市港北區の鶴見川流域沖積低地に面する丘陵上には前期初頭の花積下層式土器を出土の貝塚に續く、關山式 黒濱式土器を出土の貝塚が全く未發見であり、前期末の諸磯式土器を出土の貝塚は多數發見されているが、獸 魚骨とも極めて少く、漁具としての骨角製釣針 耜 銚などの發掘例も極めて少い。關東地方で前期の關山式以降の貝塚が、初頭の花積下層式土器出土貝塚や、中期の貝塚に比較して獸、魚骨の出土量が極めて乏しいと云う事實は、當時何等かの理由で、狩獵、漁撈を手控えたものか、獸類や魚族の數が激減したものか、或は獸、魚骨の捨場が貝塚以外のところに選ばれたからであらうと云うことが考えられる。

菊名、下組兩貝塚發見の魚骨で現在までに種名の判つたものは、

	菊名	下組
1	マダイ ○	○
2	クロダイ ◎	◎
3	スズキ ○	○
4	エイの類 ○	○
5	ハモ ○	○

6	サメの一種	○	
7	ダツ		○
8	マアジ		○
9	ブリ		○
10	ボラ		○
11	ヘダイ		○
12	チダイ		○
13	キダイ		○
14	コチ	○	○
15	カナガシラ		○
16	ヒラメ		○
17	カレイの類		○
18	コイ科の一種		○
19	フグの類	○	

以上の一九種類で、下組貝塚は魚骨を熱心に研究される大給尹氏が調査されたため多くの種類が見出されたもので、<sup>(13)</sup> 菊名貝塚でも現在知られていないが、桑山龍進氏發掘資料の魚骨などを丹念に調べれば、まだく種名が増加すると思

われる。

釣針は早期のもの如く完成された完形品は極めて乏しく、大給氏が所藏される齊藤端造氏發掘の未發表資料數點が、最も形の整つたものであり、外鑿のあるもので、結合釣針以外で有鑿の釣針が出土したのは、今日まで知られた例ではこれが最古のものであろう。第一圖18は大給氏所藏の下組貝塚出土品の一例である。早大の西村正衛氏が古代一、二合併號誌上に報告された下組貝塚の出土品は先端部の鈎先を缺いているが無鑿のものらしい。<sup>19)</sup>以上二點共に鹿角製である。また菊名貝塚の出土品にも外鑿ある鹿角製釣針の尖端部破片がある。また甲野氏が結合釣針の軸部ではないかとされたものが桑山氏の菊名貝塚發掘品中にあるが、桑山氏も筆者もこの獸骨製の棒狀の骨器を釣針の軸部であると斷定をなし得ない。一應疑問のものとして置く。

第一圖19は茨城縣野中貝塚出土の鹿角製釣針の軸部破片であるが、頭部のチモト（溝）が浅いながら軸を一周している。

第一圖20は青森縣八戸市是川一王寺貝塚から發掘された鹿角製の釣針で、前期の中頃の圓筒土器下層B式乃至はC式に伴出したものと思われる。先端部も太く無鑿である。また軸の頭部の形は夏島貝塚の田戸上層式土器に伴出した15のものに類似している。

また一王寺貝塚からは、21に圖示したような鹿角製の棒狀の角器が相當數出土している。頭部に貫孔があり、末端部は細くなつている。結合釣針の軸部とも考えられるが、これと組合せになる骨角製の先端部は發見されていない。先端部は木または竹のようなものであつたのであろうか。一應疑問のものとして置く。<sup>20)</sup>

前期の時代の骨角製釣針で今日までに報告されたものは大體以上に記した例ぐらいで、關東地方では花積下層式文化に引續く、關山式以降の貝塚などからの發見例は全く知られていない。また奥羽地方においては、一王寺貝塚以外の發見品は若干存在すると思うが、それらの多くは未發表の資料で、筆者などの目にふれていないものである。また關東以西の早、前期の遺跡からは骨角製釣針の發見は今までにないようである。

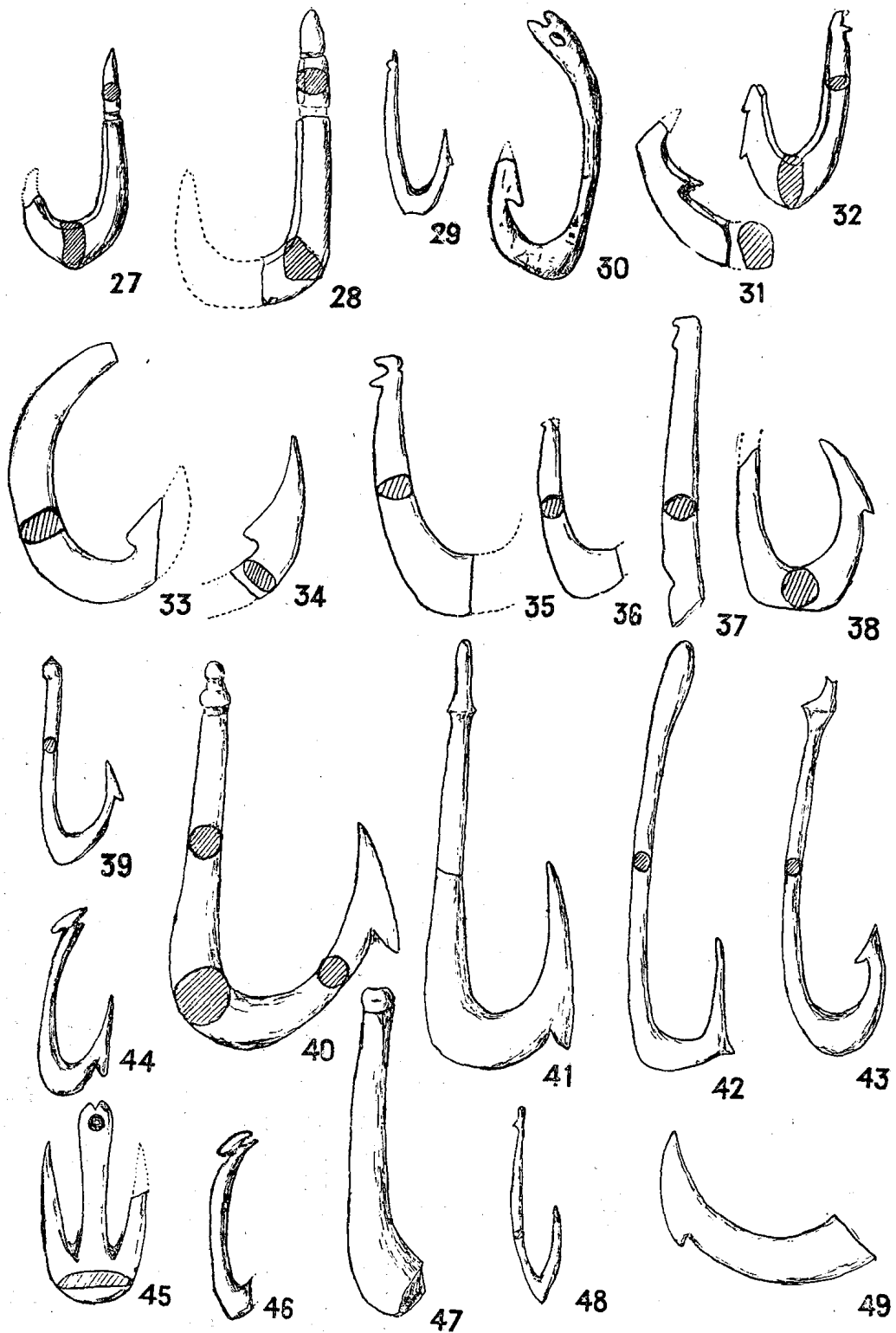
北海道では函館市外龜田村桔梗野サイベ澤貝塚で釣針が出土していることが『日本考古學年報、2』に報告されているが、<sup>(14)</sup>詳細な報告書が未刊のため、その形状と共に、下層の前期の文化層から出土したものか、上層の中期の文化層から出土したものかも不詳である。この外に北海道のものは全く報告されていない。

また前期初頭の鹿角製釣針の製作工程については桑山龍進氏が横濱市菊名貝塚出土の多數の鹿角製釣針及び製作中途に破損した未完成品などを比較検討されて、興味ある研究結果を發表されている。<sup>(15)</sup>同氏の菊名貝塚出土品を見ると鹿角の又狀部を釣針を製作するに適切な長さ<sup>(15)</sup>に、又狀部を残し上下を切斷、枝部も先端部を切斷、次にこの釣針を製作しようとする又狀部を中心部から縦に眞二つに割くため、枝部と幹部の兩側から縦に擦切っている。そして鹿角の中心部の海綿狀の部分を除き、外周の緻密な角質の部分<sup>(15)</sup>を加工して二本の釣針を製作している。製作順序は先づ腰から先端部を第一次加工し、次に軸の頭部にあたるチモトの部分の加工にあたるらしい。筆者も縦に二つに割った又狀部の先端、軸の頭部にあたる部分に二條の浅い擦切痕を入れ、チモトの部分の第一次加工を開始した、腰の曲りから先、又狀部を缺損した鹿角製釣針の未製品を茨城縣野中貝塚で發掘している。これはチモトの第一次加工中に誤つて腰の部分から先端部を折損して廢棄したものかと思われる。<sup>(16)</sup>

縄文文化中期の骨角製釣針の出土例は余り多くはなく、特に前期に引續く中期前半のものはほとんど知られていない。早稻田大學考古學研究室の西村正衛氏が岩手縣大船渡市赤崎町清水貝塚より發掘された未發表のものなどが唯一のものではなからうか。

南關東地方の出土例としては、第一圖22に圖示した横須賀市久比里、江戸坂貝塚出土品や、23に圖示した千葉縣市川市柏井小字姥山貝塚出土品などが古くから知られた完形品である。久比里字江戸坂貝塚出土の鹿角製釣針は外鏃のあるもので、前期の諸遺跡から發見されているものと形狀は類似點が多い。23の姥山貝塚發見の鹿角製釣針は江見忠功氏が發掘したもので、腰の部分が直線狀をなし、先端部の下端、先曲りのところに瘤狀の外鏃を付した特異な形をしたものである。<sup>(16)</sup> 腰が直線狀をなしたこれと類似の形をした鐵製の釣針は、現在青森縣八戸市附近の三陸地方北部海岸でタコ釣用の釣針として使用している。

第一圖24、25、26は福島縣平市下大越字南作貝塚で縄文文化中期の阿玉臺式 加會利E I式の土器片などと共に出土した鹿角製の釣針であり、軸の頭部のチモトの形は第二圖27、28に圖示した茨城縣日立市（舊坂本村）南高野貝塚出土の鹿角製釣針に類似しており、南高野貝塚は上層から後期の堀ノ内式 加會利B式などの土器も發掘されているようであるが、加會利E式土器を主として出土し、阿玉臺式土器も出土しているとのことであり、<sup>(17)</sup> 恐らく前記27、28に圖示の釣針も中期の土器を出土の文化層からの發掘品と考えられるので、福島縣南部の太平洋岸から茨城縣北部に亙つて中期の時代に24—28に示すような形のものが多くつくられたと見ることができそうである。先端部の先を缺いているため明確でないが25、26、27に圖示したものから考えると、<sup>(18)</sup> いづれも無鏃のように思われる。



29は福島縣岩磐市（舊石城郡鹿島村）御代小字合曹子貝塚出土の度角製釣針で外鑿がある。合曹子貝塚はA、B、C、の三貝塚があり、<sup>(18)</sup>中期の加曾利EⅠ式Ⅱ式 堀ノ内式などの土器が出土している。この釣針は中期末乃至後期初頭のものであろうか。

30は岩手縣宮古市歛ヶ崎小字館山貝塚の出土品で、岸上鎌吉博士の名著英文『日本の有史以前の漁業』に掲載されているものである。歛ヶ崎貝塚附近からは早、前期の土器片も出土するが、主として貝層から出土する土器は中期、後期のものであり、西村正衛氏が先年調査された岩手縣大船渡市蛸ノ浦貝塚では大木8b、9式などの土器と共にこの形の鹿角製釣針が出土したとこととであり、この形のものとは三陸海岸の中期の後半に流行したものと思われる。軸の頭部に紐を通す貫孔があり、その上に切込みのあるのが特徴で、また軸が柱状をなさず内彎するのも一特徴である。

31、32は神奈川縣横須賀市榎戸貝塚<sup>(19)</sup>から出土した鹿角製の釣針で、堀ノ内Ⅱ式土器に伴出したものであり、先端部に二つの内鑿、外鑿のある例で、軸のチモトに特徴がある。

33、39は千葉縣館山市濱田小字船越、鉦切神社内洞窟遺跡出土の釣針で、33、37は鹿角製、38、39は猪牙製である。本遺跡の報告を執筆した金子浩昌氏は、第一類 曲軸系釣針、a内鉤を有するもの、b無鉤と思われるもの。

第二類、直軸系の釣針 a鹿角製U字型のもの。b骨製のもの、c猪牙製のもの、d外鉤を有するもの、e内鉤を有するもの。と分類している。<sup>(20)</sup>直軸のU字形のものは榎戸貝塚のものに類似している。本洞窟は主として稱名寺式 堀ノ内Ⅰ式Ⅱ式を出土し、前記の釣針も多くはこれらの土器に伴出したものと思われる、南關東地方の縄文文化後期初頭の鹿角製、猪牙製釣針の形態的特徴の一端を知ることができる。



40は千葉市園生貝塚、41は茨城縣江戸崎町椎塚貝塚、42は茨城縣北相馬郡利根町立木貝塚の出土品で、いづれも鹿角製であり、後期中葉の土器と伴出したものである。いづれも外鑿があるが、41の椎塚貝塚出土のものはチモトの形態にも特徴があり、また外鑿が腰に近い先曲りの部分にあり、42の立木貝塚出土のものは先曲りの部分に腰に平行に、先端部に直角に、僅かにばらのとげ状に外鑿がついている。軸の頭部は若干ふとめになつていただけで余り特徴がない、一應關東地方の後期中頃のものとして、各々異つた貝塚出土の三種三様の鹿角製釣針を例示したが、出土例が少いためこの時期に最も多いものの特徴が如何なるものであるかは知ることはできなかつた。

43、44、45、46、は岩手縣陸前高田市小友町門前貝塚の出土品で、いづれも鹿角製である。43の軸頭部のチモトは41の椎塚貝塚のものに類似しているが鑿は内鑿である。門前貝塚は後期の堀ノ内Ⅱ式、加會利B式併行の土器も一部の地區で出土するが、大部分の地域からは後期初頭の門前式とも稱すべき大木10式に後續する形式の土器が出土し、門前式土器を出土の貝層からは44、45に圖示したような鹿角製釣針が出土している。44の釣針は軸の頭部が鳥の頭部を思わすような特異な形をしているが、本貝塚から出土の釣針は45のような形のもの以外のほとんどはこの形のもので、先端部には44の如く外鑿一つあるものが多い。大きさも43の釣針のような大形品は稀である。腰の底邊は44のように圓いものと、46の如く尖つたものがある。45の如く軸を中央にして兩側に先端部のある錨狀の鹿角製釣針も前者について本貝塚から相當數出土している。大船渡市赤崎町蛸浦貝塚や宮崎縣牡鹿郡稻井村沼津貝塚からも同形のものが発掘されている。

以上の二の形のもののは後期初頭の宮城、岩手方面の海岸地方で使われた特徴ある鹿角製釣針と見ることができ。な

お偶然の一致と考えるが、大洋州のニュージーランドのマオリ族が使っている骨製釣針の軸の頭部は44、46、の釣針の軸頭部とその形態が非常に類似していることは興味深いことである。

なお縄文文化後期の時代になると西日本からの出土例も若干報告されている。

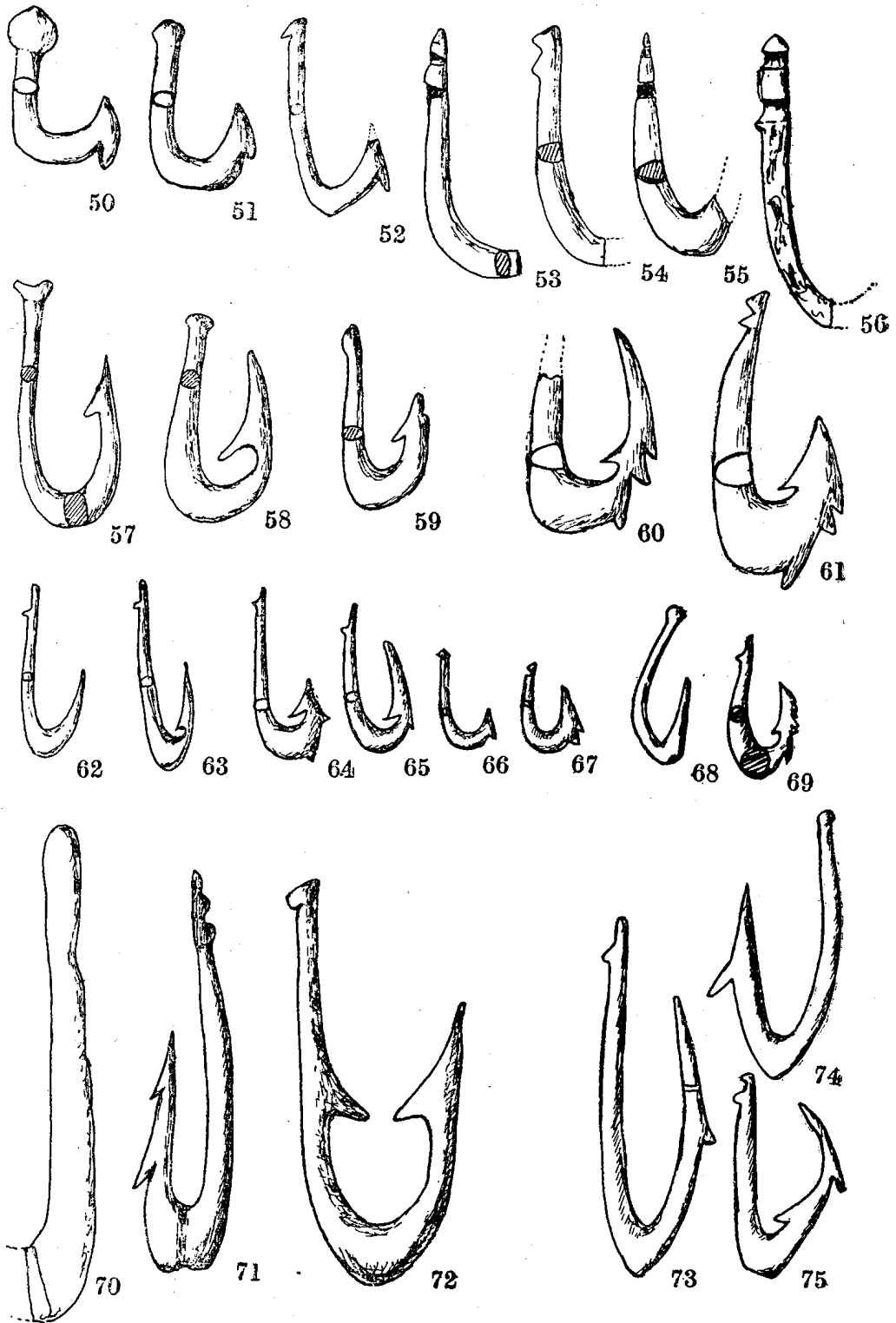
一九二一年發刊の考古學雜誌上に山崎五十麿氏が鹿兒島縣日置郡市來町川上貝塚の報告を執筆された中に『骨類に於て猪骨頗る豊富にして、就中下顎多し、其他牙、鹿角あり。骨器は釣針の破片』と記されているが、若しこれが誤りでなければ九州地方發見の縄文文化時代の唯一の骨製釣針であろう。

中國地方に入つては岡山縣笠岡市大字大島字名切、津雲貝塚出土の鹿角製釣針が古く清野博士などによつて報告されている。第2圖47に示したものがそれで軸部のみの破片である。また甲野勇氏の古代文化誌上の報告の末尾にはこれとは異なる先端部の先のみを缺いた内鑿(22)と思われる釣針が圖示されている。

また最近の發掘調査で同縣倉敷市福田貝塚からも後期の土器と共に第2圖49に示した外鑿ある鹿角製の釣針の先端部が發掘されている。(23)

第2圖48、第3圖62は共に奥羽地方で後期末の土器に伴つて發見されたもので、後記する奥羽地方の晩期の骨角製釣針の基本形となるものである。48は岩手縣陸前高田市小友町字瀬澤貝塚出土のものであり、62は同縣大船渡市赤崎町大洞貝塚の出土品である。軸頭部のチモトに共通の特徴が見られる。

第3圖50、51は愛知縣渥味郡田原町吉胡貝塚で清野博士が發掘調査された際、出土の釣針である。遺物を實見しないので骨製か鹿角製かは不明。吉胡貝塚からはこの外數點の釣針破片が出土しており、また一九五一年三月下旬から四月



上旬に互つて文化財保護委員會で發掘調査を行つた際にも第1トレンチ南方第2擴張區の貝層下有機土層から釣針破片が出土し、第2トレンチJ區砂利上部からは長さ8糎もある大形鹿角製釣針が發掘されている。この釣針は先端部の先が内灣した無鏤の特異なものである。(吉胡貝塚第43圖15參照<sup>24</sup>) 恐らく後期の土器に伴出したものであろうと記されている。第3圖50、51に掲げたものは後期の土器に伴つたものか、晩期の土器に伴つたものかは明らかでない。

第3圖52は愛知縣豐橋市大村町大蚊里貝塚を一九四九年一〇月、明治大學文學部考古學研究室で發掘調査した際出土した鹿角製釣針で繩文文化晩期の土器に伴つたものである。軸部のチモトに特徴があり、先端部には外鏤がついてゐる。

53、56は福島縣磐城市古湊、小字寺脇、修生院わき貝塚出土のもので、大部分は晩期の大洞C式土器に伴つたものと思われる。先端部はいづれも缺けているので、如何なる形のものか不明であるが、軸頭部のチモトが一様でないのは、捕獲する魚類などの相違であるが、若干時代的にずれかあるためか究明してみたい問題である。53、56は鹿角製であり、54、55は猪牙製である。

57は福島縣相馬郡新地村小川貝塚で發見された鹿角製釣針で、晩期前半の時期の土器に伴出したものと思われるもの、58は岩手縣陸前高田市小友町瀬澤貝塚出土のもので内鏤が長い點が特異であるが、時期は後期の後半か晩期のいづれかであるが明確でない。59は同縣大船渡市末崎町細浦貝塚の出土の鹿角製釣針であるが前者同様、後期のものか晩期のものか明確を缺く。兩貝塚とも後期から晩期に亙る長期間につくられた貝塚で、地域、層によつて異なる形式の土器を出土するが、兩者共に土器形式の相違、伴出土器などを考慮されない過去の發掘品であるため、遺憾ながら詳細が不明な次

第である。

60、61は大船渡市赤崎町大洞貝塚の出土品で、先端部の内外に鑿のある、しかも外鑿が三重にもなつた長さ五糎内外ある大形鹿角製釣針は大洞C<sub>2</sub>式以降の土器に伴うものようである。60の如く先端部の先が内彎した、先端の長いものと、61の如く太く短いものの相違は捕獲する魚類の相違によるものであろうか。62・70は大洞貝塚A地區で後期末の土器を出土の貝層から發掘したもので、70の如く長さ9糎にも及ぶ大形釣針でも、軸の形が60・61のものとは全く相違している。いづれも鹿角製である。

63・67に示したのも大洞A'地區貝塚で筆者などが發掘したもので、いづれも鹿角製、63は大洞B式土器に伴出、他四本は大洞BC式土器を出土の貝層から發掘された。

大洞A'地區の大洞BC式土器片を出土の貝層中には左に記すような魚骨が出土している。

- |   |     |   |     |
|---|-----|---|-----|
| 1 | マダイ | 5 | マグロ |
| 2 | スズキ | 6 | サメ  |
| 3 | マアジ | 7 | カツオ |
| 4 | フグ  | 8 | ブリ  |

この外種不明のものが多數ある。(本貝塚の魚骨はまだ専門家の鑑別を受けていない)

以上に記したような魚類の中、62・67のような小形な釣針で捕採した魚はどのような種類のものであろうか。

68は宮城縣牡鹿郡稻井村沼津貝塚出土のもので軸が内彎している。69は陸前高田市小友町の出土とあるが恐らく

瀬澤貝塚のもので晩期の土器に伴つたものであろう。

71 は青森縣西津輕郡木造町（舊館岡村）龜ガ岡遺跡で古く發掘されたもので、岸上博士の名著に圖が掲載されているものである。恐らく晩期の土器に伴出したものと思われる。腰の中央に縦の溝があるらしい、如何なるためのものであろうか。

72、75 は宮城縣牡鹿郡稻井村沼津貝塚出土の鹿角製の釣針で、多くは晩期のものと思われるが、後期の土器に伴つたものもあるかもしれない。

72 の如く先端部の内鑿に對應して、軸の中央部からも鑿の出ている例は、本貝塚以外には出土例の極めて少ないもので、他貝塚の出土例を加えても大體この地方一帯の極地的なものであつたらしい。

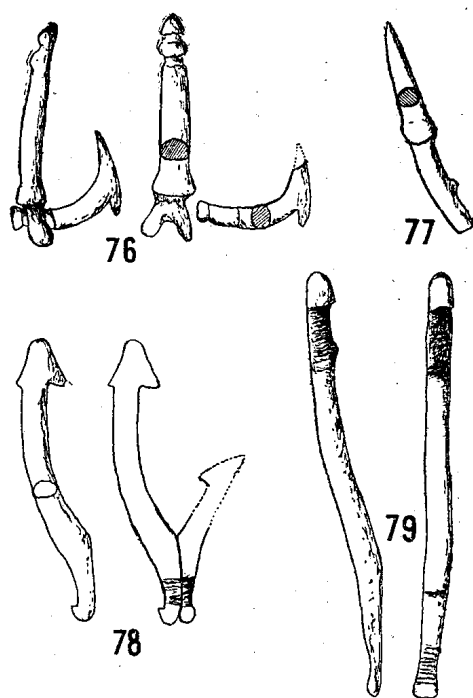
73 も先端部の非常に長い特殊例である。繩文文化後期以降の奥羽地方大平洋岸の貝塚からは各種の形の骨角牙製の釣針が發見されるが、これは捕採する目的の魚によつて、現代の如く釣針の形を變えるのではなからうか。

第4圖は奥羽地方の繩文文化晩期の遺跡から出土した結合釣針で、76 は福島縣磐城市古湊寺脇貝塚、77 は先端部のみで同縣相馬郡新地村小川貝塚、78・79 は軸だけで岩手縣大船渡市赤崎町大洞貝塚の出土品である。

76 に圖示した結合釣針は軸も先端部も鹿角製で、寺脇貝塚の大洞 C<sub>1</sub> 式及び C<sub>2</sub> 式の土器片を出土する貝層のみから出土し、大洞 B C 式 後期末の土器などを出土する貝層からは發見されなかつた。

寺脇貝塚と近距離にある平市下高久、久保ノ作洞窟遺跡の大洞 C<sub>2</sub> 式土器を出土した貝層からも一例であるが、同形式の結合釣針の軸部が發見されており、本形式の釣針は大洞 C<sub>1</sub> 式の後半から大洞 C<sub>2</sub> 式の時代に福島縣南部の太平洋

沿岸地方で極地的つくられたものらしいことが判つた。今日までの調査では本形式の結合釣針はこれらの地方以外の太平洋岸の同形式土器出土貝塚から発見されていないようである。



第 4 圖

本形式結合釣針は寫眞挿圖にも見られる如く寺脇貝塚からは多數発見されている。寫眞のものは嘗つて檜野照武氏が發掘調査を行つた際出土したものである。先端部には外鑿がついているが多きは一つであり、稀に二つのものもある。軸の形も大體類似しているが、直線上のものと、内彎するものがある。下の寫眞は組合せた状態を示すものである。77は新地村小川貝塚出土の結合釣針の先端部で特に記すほどの特徴もないが、先端部の頸部に球状のふくらみをつけたのは鑿に代るものであろうか。

78の左の圖は大洞貝塚出土の結合釣針の軸部で、地元の高枝の資料室に保管されていたもので、伴出土器は明確でない、恐らく右の圖の如き組合せの結合釣針と想像する。軸の頭部が三角形をなしている。

79は大洞A'地區貝塚で大洞BC式土器片と共に出土した結合釣針の軸部で、軸頭部のチモト、腰の先端部との結合部に地瀝青(Asphalt)が黒く附着しており、膠着した地瀝青に横に走る細い纖維紐を捲きつけた壓痕が残っている。これと對になる先端部は発見できなかった。長谷部博士の『骨角器漫談』の挿圖に陸前高田市瀨澤貝塚出土品に類似的の結合釣針が発見されているが前記した結合釣針とは異なる一形式であり、これも後期末乃至は晩期の時代のものと考

えるが、伴出土器が明記されていないため、正確な時期は判らない。博士は『獺澤發見品中に長さ四糎の兩端尖り、横断面圓形をなす小針がある。但しその一端の一面は殺ぎたる如く研磨されて平らな面をなし、その反対面には低き突地を設け、これの面を横に研磨し溝をつくつてある。本品こそは軸にこの平面部をあてて溝の部分を結縛し、以て鈎に供したること明らかである。但し斯る小なる鈎を以て藉の用に供したりとは認め難く、その用途を確め得ない、又針に似たる形狀をなして一端に近く横溝を有する小突地を刻みたるもの獺澤及び大洞採集品中に各一個あり、前者は七糎半後者は同八糎強、孰れも少しく弓狀に彎曲し缺刻のあると反對の端は稍々急に狹小となり尖れるも刺入には適せざるもの如く見える——中略——今假りに前記獺澤發見の小鈎と同發見の軸とを兩者の平らな面に於いて銳角をなして黒糸で結合すると鈎針の形になる』と記されている。このような結合法の鈎針は前記した如くアラスカのコディアック島 (KODIAK ISLAND) などでも發見されている。

以上で縄文文化時代の骨角牙製の鈎針資料を年代順に一應概観した。次に縄文文化以降の彌生文化及び奥羽北端部から北海道の續縄文文化の時代の骨角製鈎針について一瞥しよう。

彌生文化になると稻作が始り、各種の栽培植物の栽培も始まるが、やはり前代からの狩獵漁撈も續けられていたことは銅鐸などの繪畫によつても明らかであり、彌生文化の各形式の土器を出土する貝塚から見出される獸魚骨などによつても立證されるところである。無鏝の鹿角製と思われる鈎針は名古屋市西區西志賀貝塚から出土しており、神奈川縣三浦郡南下浦町松輪小字間口(註)に所在の海蝕洞窟から彌生文化・後期の久ヶ原式土器と共に内鏝の鈎針が出土している。報告者赤星直忠氏は骨角製品、(1)鈎針とのみ記しているので、鹿角製品か、獸骨製か、現物を實見していない筆者には判



らない。長さは六糎あり内鑿がある。形は縄文文化中期以降のものと殆ど變りがない。

また同じ三浦半島の南端部、南下浦町松輪の毘沙門海岸のC洞窟<sup>(25)</sup>において赤星氏が最下層の久が原式土器を出土の文化層から發掘した鹿角製の釣針は、長さ六、七糎あり、先端部は外鑿になつてゐる。赤星氏は報告書中で釣針の出土した最下層の貝層中で多くの魚骨を檢出したことを記し、

- 1 マダイ (顎骨)
- 2 クロダイ (同)
- 3 レンコダイ (同)
- 4 ヒラメ (同)
- 5 イナダ (同)
- 6 カジキ
- 7 ベラ科の一種 (咽頭齒)

の七種を鑑別されている。

また横須賀市の海上にある猿島洞窟<sup>(25)</sup>で赤星氏が久が原式乃至は彌生町式の土器と共に發掘された鹿角製の釣針は、長さ八・二糎あり、先端部は無鑿である。本洞窟からは左に記すような魚骨が發見されている。

- 1 マグロ
- 2 アジ
- 8 マダイ
- 9 ブダイ

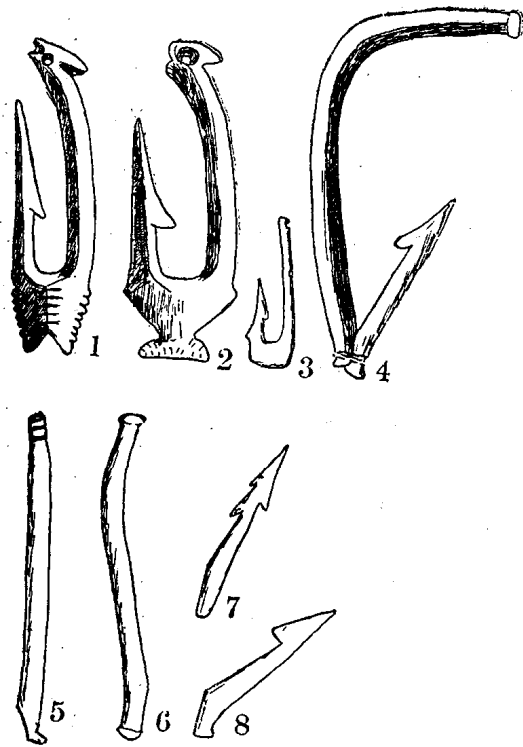
- |   |          |    |         |
|---|----------|----|---------|
| 3 | イワシ(?)   | 10 | クロダイ    |
| 4 | スズキ      | 11 | イサキ     |
| 5 | ガマス(?)   | 12 | タイの一種   |
| 6 | カナガシラ(?) | 13 | イシモチ(?) |
| 7 | サメ       | 14 | 甲イカ     |

また昆沙門海岸の洞窟<sup>(25)</sup>の下層(第三文化層)からは久ガ原式乃至は彌生町式土器に伴つて鐵製釣針と青銅製釣針が發掘されている。鐵製品は長さ四糎、先端部は内鑿になつている。また青銅製品は長さ二糎、斷面方形をなし、先端部は圖で見ると缺損しているように見られるが、赤星氏の報文中には『先端が折れ曲つていただけで、かえしが無い。根元はふくらんで紐をとめられる様になつている。細い青銅針が曲つて釣針状になつたものとも見られるが、一應釣針として扱うことにする。』と記されている。

彌生文化の時代には既に鐵製品、青銅品が存在することは周知の事實であり、釣針に鐵製品、青銅製品が骨角製品に併用されることはあり得ることであり。また骨角製の釣針、猪、銚なども彌生文化の時代のものは石器を使つて加工せず、鐵製の刀子を使つて加工しているらしく、骨角器の面に見られる加工痕を詳細に觀察すると繩文文化時代のものと異つている。昆沙門B洞窟では骨角製の釣針は發見されていないが、猪・燕形銚頭などの骨角製漁具は發掘されている。

奥羽地方では繩文文化以降の彌生文化の貝塚、洞窟遺跡の發見は極めて少く、骨角製釣針の發見例は全く報告されて

いないようである。



第 5 圖

第5圖に圖示した鹿角製乃至は獸骨製の釣針は函館に在住の故能登川隆氏が渡島半島惠山岬の近傍にある惠山貝塚を發掘調査された際、惠山式土器（大洞 A' 式）に引續く續繩文文化の一形式）と共に發掘した多數の骨角器の中の一部で、能登川氏はコロタイプ印刷の『北海道惠山先史遺物圖集』を編纂されているが、解説篇が未刊のため、まだ手許に印刷物を保存されている。<sup>(27)</sup>

1 2は腰に特徴ある鹿角製のもので、この種の破片は本貝塚からは他に數例出土しているが、他地方からの類品の出土例は余り知られていない。軸の頭部の形は奥羽地方の後期初頭の門前貝塚出土の釣針に類似している。

3は小形品で先端部の内外に各一個の鑿が交互についている。

4は軸に海獸の肋骨を使用した結合釣針、5、6は結合釣針の軸、7 8は先端部であり、鑿は7の如く内、外にあるものと、8の如く内に一つのものなど一定しないが、内鑿一つのものが多いようである。

北海道でオホーツク海沿岸を中心に惠山式土器などより年代的に見てかなり下降する新しい文化にオホーツク式土器の文化がある、惠山式に引續く、オホーツク式より若干古い文化に後北式土器の文化があるが、これらの文化に骨角製

の釣針は全くないのか、極めて少いのか、報告されたものがほとんどないようである。

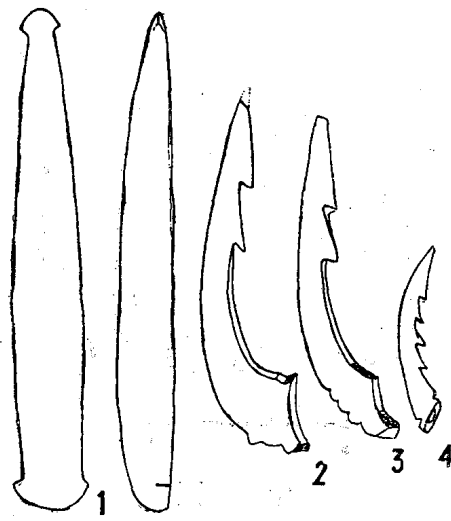
網走市のモヨロ貝塚はオホーツク式文化の著名な遺跡で、銛などの多数の骨角器が發掘されているが、骨角製釣針は極めて少く、大場利夫氏執筆の「モヨロ貝塚出土の骨角器」<sup>(28)</sup>の中に數例の結合釣針が報告されている程度である。その形は恵山やコデアック島のものに類似している。

以上繩文、彌生文化時代の骨角製釣針について概観した。一九四〇年代に甲野勇氏が古代文化誌上に釣針の研究を執筆された頃に比べると比較にならぬほど資料が増加し、何かと新事實が判明し、岸上、長谷部、甲野氏などの所説に幾多の改訂を必要とするまでになつたが、前記の如く一應のまとめとして、今日までの成果で骨角製釣針の變遷を考えようとする、まだまだ資料の不足な點が多くこれを充分に明らかにすることが不可能で、今後各形式の土器に確實に伴つたと思われる、考古學者自らが發掘した資料がなお多數増加することが望まれる次第である。

## 結 語

今日までに知られたわが國各地遺跡出土の骨角製釣針を概観してみると、繩文文化早期には小形な長さ3糎内外の無鏤の釣針が多く、奥羽北部から關東に亘つてこの外に内鏤<sup>おど</sup>のある結合釣針の先端部と、鏤のない結合釣針の先端部が發掘されている。この結合釣針の先端部を破片も加えて10本近く出土している青森縣の赤御堂貝塚でも、骨角製のこれと對になる軸らしきものは發見されていない。軸は骨角以外の腐蝕し易いものでつくられていたと云うことも考えられる。第一圖9に圖示した1 2 3などと類似の先端部を持つ骨製結合釣針は軸の方も脛骨でつくられている。この結合釣

針はソ連邦モスコ近郊のオーロソワ村の櫛目土器出土遺跡から発見されたもので各國の圖書によく引用されているものである。<sup>(29)</sup>非常に遠隔の地の類品であるが、これによつてわが國の縄文文化早期の結合釣針の軸との組合せも想像できるところである。



第 6 圖

なお第 6 圖に圖示したバイカル湖畔の古形式の櫛目土器遺跡出土の骨角製結合釣針も先端部は 2、3、4 に示す如く内鑿であり、軸は 1 のような形のものである。

縄文文化早期の釣針は關東以西に貝塚、洞窟などの遺跡が少く、骨角器を遺存するような遺跡が少いたためか、全く発見されないが、別項の骨角製釣針出土遺跡地名表にも見られる如く、縄文、彌生文化全期間を通じて西日本には釣針の出土例が極めて少く、九州地方では山崎氏の報告の疑問のある市來町川上貝塚例が唯一のもののようなものである。

また地名表によつても判る如く骨角製釣針出土の貝塚概して外海に直面するところに多いようである。従つてわが國の骨角製釣針の傳播系路は北方に考えられ、北ユーラシア大陸に廣く分布する櫛目土器の古形式の文化に伴う結合釣針と全く無關係ではなく、關連性が強いもののように思われる。特に早期の結合釣針については他の土器、石器などと共に傳播系路については慎重な比較検討調査がなされるべきであると考ええる。

また東北日本の太平洋岸に比較的濃密な分布を示す縄文文化各期の骨角製釣針は北海道から千島、カムチャツカ、ア

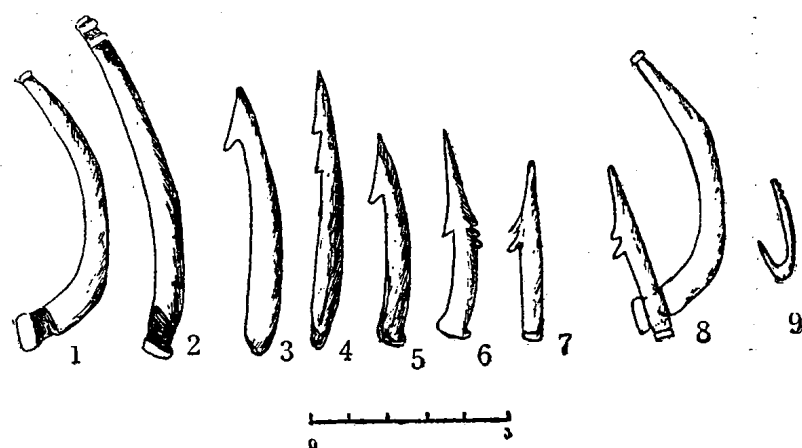
リューション方面の諸遺跡出土のものには類似品が求められない。これはこの方面に縄文文化と同一年代にまで遡り得る遺跡の發見調査がないためとも考えられる。また沿海州方面の日本海岸の考古學的調査はウラジオストク周邊を除いては全く未開拓であるのか、調査報告が公刊されておらず、この方面との関連性の有無を知ることが今日のところ

全く不可能に近い。現在アリューション列島からアラスカ南部の北部環太平洋岸の諸遺跡發見の骨角製漁具に最も近似するものは、わが國の古代文化中では續縄文文化の諸遺跡發見のものである。

第7圖はアラスカ南西部のコディアック島の貝塚<sup>(31)</sup>發見の結合釣針であるが、軸の形状、先端部の形状共に非常に類似し、軸に海獸の肋骨を使用する點まで共通している。

なお環太平洋岸では南半球のニュージーランドやその周邊島嶼、ハワイ諸島などで、骨角製、貝製、龜甲製、或は木製などの釣針がつくられ、最近まで使用されていたところもあるが、これらがわが國の文化に關連あるものかどうかは非常に疑しい。

西南日本から琉球列島、臺灣方面の石器時代遺跡からは未だ一點の骨角製釣針の發見もないようであり、恐らくこれらの地方では他の方法で魚類を捕採していたのではないかと想像すると共に、骨、角など以外の腐蝕し易いもので釣針を製



第 7 圖

作していたのではないかとの疑も生ずるのであるが、九州以南の透明度の強い南方海域では釣具に依るよりも、猎・銚のような突具が魚類の捕採に便利であつたと考えられる。また突具は南方では骨角に代つて竹などが多く使われたと考えられる。

以上今日の成果をもつて考えを進めてくると、骨角製漁撈具としての釣針は北ユーラシアから北部環太平洋岸に擴る一連の漁撈文化の所産で、わが國の縄文文化の中に見られる骨角製の釣針も、この一連の文化の中の一端を擔つたものと考えられる。しかしわが國の周邊地域の考古學的調査はまだく非常に未開拓であるため、縄文文化の前半にまで遡り得る古い時代の遺跡はほとんど未發見と申しても過言ではなく、この方面の探查研究が進捗しなければ、骨角製釣針は言うに及ばず、北方からの古い石器時代文化の傳播系路は永久に解明し得ないものと思うものである。

わが國の考古學的研究は近年めざましい躍進があつたとは云え、まだく資料が充分に出揃つたとは云えず、疑問の點も多々存在するのであるが、考古學は常に分析的な研究と綜合的研究を繰り返して躍進する學問であり、ここに一應縄文、彌生文化時代の骨角製漁具としての釣針の變遷を大觀し、現段階において過去の誤つた見解を訂正して置くことも無意義ではないと考え、本稿をまとめた次第である。

註

一九五八年六月一五日稿了

Kamakichi Kishinouye

(1) (岸上鎌吉) Prhistoric Fishing in Japan.

東京帝國大學農學紀要第2卷第7號 1911年

(2) 長谷部言人 燕形銚頭

人類學雜誌第41卷第3號 一九二六年

〃 燕形銚頭とキテ

人類學雜誌第41卷第7號 一九二六年

〃 本輪西貝塚の鹿角製銚頭

人類學雜誌第41卷第10號 一九二六年

日本石器時代における骨角製釣針の研究

以上の三篇は

長谷部言人 先史學研究

大岡山書店刊一九二七年

に掲載されている。

長谷部言人 骨角器漫談

史前學雜誌第5卷第1號一九三三年

(3) 清野謙次 太平洋に於ける民族文化の交流

創元社刊一九四四年

(4) 第三章 環太平洋文化としての離頭有紐利器特に日本及びベーリング海に於ける此の利器の發達

甲 野 勇 日本石器時代産鈞針 古代文化第13卷第3號一九三二年

——特に關東産鈞針に關する一、二の考察——

先史考古學入門狩獵と漁撈の項

山岡書店刊一九四七年

(5) 羽原又吉 日本古代漁業經濟史

改造社刊一九四九年

(6) 江坂輝彌 考古學ノ1ト2卷 先史時代 繩文文化

日本平論新社刊一九五七年

(7) 岡本 勇 相模・平坂貝塚

駿台史學第三號一九五三年

(8) 桑山龍造 菊名遺跡と其の文化

大正大學史學會一九四九年

(9) 西村正衛 神奈川縣橫濱市港北區下田下組西貝塚

古代1、2合併號一九五四年

(10) 中澤保 茨城縣野中貝塚調査報告

考古學雜誌第39卷3、4併號合一九五四年

(11) 眞良信夫

考古學雜誌第2卷第6號一九三〇年

(12) 宮坂光次 青森縣是川村一王寺史前時代遺跡發掘調査報告

史前學雜誌第2卷第6號一九三〇年

貝塚は單なる捨場ではなく、貝殻などすべての彼等の食料殘滓、器物の靈魂を祭る場所、これらの食料となる動植物が再びこの世に生れ變り豊産することなどを祈つた場所であろうとの考えは北海道學藝大學教授河野廣道博士がアイヌの土俗などより考えて指適されたところであり、前期の時代には獸魚骨の祭場は貝塚と場所を異にしたのではないかとの疑問も持たれる。

(13) 大 給 尹 神奈川縣下組貝塚に於ける自然遺物

史學第22卷第1號一九四三年

(14) 大場利夫 函館市郊外サイベ澤遺跡

日本考古學年報2一九四九年度



- (15) 桑山龍進 鹿角製釣針の作り方 第12回日本人類學會、日本民族學協會連合大會紀事 一九五八年
- (16) 松村瞭 下總姥山ニ於ケル石器時代遺物 東京帝國大學理學部人類學教室研究報告第5編 一九三二年
- (17) 小祝平 久慈郡坂本村南高野貝塚發掘報告 史考10號茨城縣立太田一高史學全刊一九五三年
- (18) 八代義定 藤原川流域に於ける石器時代の道跡と實年代 人類學雜誌第47卷第4號 一九三二年
- (19) 渡邊一雄 磐城市繩文文化時代 磐城史跡研究會叢書第1輯一九五七年
- 赤星直忠 橫須賀市榎戸貝塚について 考古學第8卷第11號 一九三七年
- 小笠原義隆
- 角井長一
- (20) 平野元三郎 館山鉦切洞窟 千葉縣教育委員會刊 一九五八年
- 金子浩昌 薩摩國日置郡西市來村貝塚に就て 考古學雜誌第11卷第12號 一九二一年
- (21) 山崎五十磨 備中國淺口郡大島村津雲貝塚發掘報告 京都帝國大學文學部考古學研究報告 一九二〇年
- (22) 島田貞彥
- 清野謙次
- 梅原末治
- (23) 鎌木義昌 岡山縣重要文化財圖錄 考古學資料編 岡山縣教育委員會刊 一九五七年
- (24) 文化財保護委員會編 吉胡貝塚 埋藏文化財發掘調查報告第1 一九五二年
- (25) 毛利總七郎 陸前沼津貝塚骨角器圖錄 一九四〇年刊
- 遠藤源七
- 杉山壽榮男
- ”
- ”

日本石器時代における骨角製釣針の研究

解説

一九五三年刊

五七三

(26) 赤星直忠 海蝕洞窟

——三浦半島に於ける彌生式遺跡——

神奈川縣文化財調査報告第20輯 一九五三年

(27) 能登川隆 北海道惠山先史遺物圖集

圖録のみ一九四二年頃完成し未刊

(28) 大場利夫 モヨロ貝塚出土の骨角器

北海道大學北方文化研究報告第10輯 一九五五年

(29) J. G. D. CLARK Prehistoric EUROPE the economic basis

METHUEN Co. LTD. LONDON 1952年

(30) ソ連邦古學報18

一九五〇年

(31) Robert F HEIZER Archaeology of the UYAK Site KODIAK ISLAND, ALASKA

ANTHROPOLOGICAL RECORDS 17:1 UNIV. of CALIFORNIA PRESS 1956

「その他の釣針出土遺跡參考文獻」

江坂輝彌 三戸郡大館村十日市赤御堂貝塚調査略報

奥南史宛2號 一九五七年

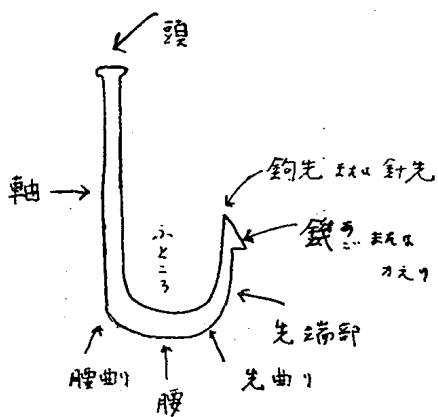
江坂輝彌 大洞貝塚

大船渡市教育委員會刊社教シリーズ第七集

吉田格 茨城縣花輪台貝塚概報

日本考古學第一卷第一號 一九四八年

補註 釣針の各部の名稱



骨角製釣針出土遺跡地名表

遺跡地名	時期	形状	文献	備考 (所藏者)
鹿兒縣日置郡市來町 川上(貝塚) 岡山縣笠岡市大島 名切津雲(貝塚)	繩文・後期 繩文・後期 繩文・後期	鹿角製軸部破片、無鏃先端部針先を缺くもの、他に無鏃長さ三厘のもの 鹿角製外鏃ある先端部破片 鹿角製外鏃釣針先端部破片 2 未製品破片 1 鹿角製無鏃	山崎五十磨、薩摩國日置郡西市來村貝塚に就て考古學雜誌11卷12號一九二一年京都帝國大學文學部考古學研究報告第5冊一九二〇年甲野勇日本石器時代産釣針、古代文化13卷3號一九四二年陸前沼津貝塚骨角圖錄 鎌木義昌他、岡山縣重要文化財圖錄考古學資料編一九五七年 未刊清野謙次日本貝塚の研究上卷	文獻に出土のみを報ず 京都大學考古學研究室 倉敷考古館
愛知縣名古屋市西區貝田町 一丁目西志賀(貝塚)	彌生・前・中期	彌生	小栗鐵次郎、名古屋市西志賀貝塚(其二)愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第12一九三四年 東海の先史遺跡(尾張編)澄田正一、伊藤安男共著一九五五年	
知多郡知多町(舊旭町) 大草(貝塚)	繩文・後期			

日本石器時代における骨角製釣針の研究

" 豐橋市大村町大蚊里(貝塚) <small>お、がま</small>	繩文・晩期	鹿角製外鑱	江坂輝彌、考古學ノ1ト2卷(先史時代繩文文化)一九五七年	明治大學考古學研究室
" 瓜郷町(第二貝塚)	彌生	鹿角製無鑱長 さ2.1 糎	和島誠一、大昔の人の生活——瓜郷遺跡の發掘——岩波書店一九五三年久永春男瓜郷遺跡の話豐橋産業文化大博覽會一九五四年	豐橋市中央公民館
" 渥味郡田原町吉胡 (貝塚)	繩文・後晩期	完形品2 點破片數點あり	未刊、清野謙次日本貝塚の研究上卷岩波書店	
" 福井縣坂井郡三國町 (舊雄島村)	繩文・後期?	鹿角製無鑱長 さ約8 糎	埋藏文化財調査報告第一吉胡貝塚一九五二年 陸前沼津貝塚骨角器圖錄及び解説一九五二年	
岐阜縣山縣郡谷合村九合 (洞窟)	繩文・後期	軸部破片千葉縣鉈切のものに類似す	名古屋大學考古學研究室紀要第1一九五六年	名古屋大學考古學研究室
神奈川縣藤澤市(舊小出村) 堤(貝塚)	繩文・後期 堀ノ内式	鹿角製無鑱釣針形なるも用途は異なるか	赤星直忠、神奈川縣高座郡小出村堤貝塚考古學12卷1號一九四一年	
" 三浦市(舊南下浦町) 松輪昆沙門海岸(C 洞窟)	彌生・久ヶ原	度角製外鑱釣針長さ6.7 糎同未製品	赤星直忠、海蝕洞窟神奈川縣文化財調査報告20集一九五三年	
" 間口 (洞窟)	彌生・久ヶ原	鹿角製内鑱釣針長さ6 糎及	"	

横須賀市猿島(洞窟)	彌生久ヶ原 彌生町	び腰部破片 鹿角製無鏝釣 針長さ8.2糎及 び先端部破片 鹿角製先曲り のところを外 鏝あり、他に 破片1	"	丘淺次郎、久比里貝塚人類學雜誌2卷 15號一八八七年	明治大學考古 學研究室
(貝塚) 久比里江戸坂	繩文・中期	鹿角外鏝2内 鏝先端部片1 軸部破片1	赤星小笠原角井、横須賀市榎戸貝塚に ついて考古學8卷11號一九三七年		
榎戸(貝塚)	繩文・後期 堀ノ内式	夏島式(田戸 上層式土器出 土貝層から無 鏝完形品2そ の他に破片	杉原莊介、芹澤長介、神奈川縣夏島に おける繩文文化初頭の貝塚明治大學文 學部研究報告考古學第二册一九五八年		
夏島町(貝塚)	繩文・早期 夏島(茅山式)	鹿角製無鏝長 さ2.5糎と長さ 1.8糎長さ8糎 の3點と軸部 破片1	吉田格、野島貝塚遺跡3號(鎌倉考古 學同好會刊)一九四八年		
横濱市金澤區野島町 (貝塚)	繩文・早期 野島式	軸部破片2 先端部破片1	吉田格、横濱市稱名寺貝塚、日本考古學 協會第7回總會研究發表要旨、吉田格、 横濱市稱名寺貝塚(第2回發掘報告)日		
" " " 寺前西町 稱名寺(B貝塚)	繩文・後期 稱名寺式				

保土ヶ谷區佛向町(貝塚)	繩文・後期	鹿角製鈎針	本考古學協會第21回總會研究發表要旨	岡本勇氏教示
神奈川區三ツ澤東町貝塚	繩文・後期	鹿角製外鑢あ	桑山龍進、菊名遺跡と其の文化大正大	岡本勇氏教示
港北區菊名町(貝塚)	繩文・前期	る先端部破片	學會プリント一九三九年	
下田町下組(貝塚)	繩文・前期	2軸部破片な	西村正衛、中澤保、神奈川縣橫濱市港	
東京都品川區大井鹿島町 (大森貝塚)	花積下層式	ど多數	北區下田下組西貝塚、古代第1、2合	
大田區千鳥久保(貝塚)	繩文・後期	鹿角製外鑢あ	併號一九四四年	
千葉縣市川市柏井姥山(貝塚)	繩文・後期	る完形品無鑢	エドワード・エス・モース大森介墟古	
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	のものなど數	物編一八七九年	
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	個	甲野勇、日本石器時代産鈎針、古代文	
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	鹿角製鈎針軸	化13卷3號一九四二年	
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	部、腰部破片	松村瞭・八幡一郎・小金井良精、下總	
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	數點	姥山に於ける石器時代遺跡東大理學部	
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	に外鑢ありそ	人類學教室研究報告第5編一九三二年	
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	の他軸部破片	江坂輝彌考古學ノート2卷(先史時代	
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	鹿角製外鑢、	II繩文文化)一九五七年	
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	長さ7.5糎		
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	に外鑢ありそ		
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	の他軸部破片		
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	鹿角製外鑢、		
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	長さ7.5糎		
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	に外鑢ありそ		
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	の他軸部破片		
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	鹿角製外鑢、		
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	長さ7.5糎		
千葉市園生町長者山 (貝塚)	繩文・中・後	に外鑢ありそ		
繩文・中・後	の他軸部破片	江坂輝彌考古學ノート2卷(先史時代	II繩文文化)一九五七年	
鹿角製外鑢、	長さ7.5糎	上記文献に出		
長さ7.5糎	土のことが記			
上記文献に出	されているのみ			

香取郡小見川町白井雷 (貝塚)	長生郡一の宮町貝殻塚 (貝塚)	館山市大字濱田字船越鉦 切神社(洞窟内貝塚)	祇園(貝塚)	木更津市永井作(貝塚)	矢作(貝塚)	加會利(貝塚)	東寺山(貝塚)
縄文・中期	縄文・後期 堀ノ内式	縄文・後期稱 名寺堀ノ内式	縄文・後期	縄文・後期	縄文・後期 堀ノ内式	縄文・中期	縄文・中期
	鹿角製、先端部を缺く、長さ5.5糎、他に先端の缺損したもの1	外鏝完形品1 内鏝先端部針 先缺損1、外18點	先端部針先缺損1、先端部缺損1	先端部針先缺損1、軸部破片2	先端部針先缺損1、軸部破片2	鹿角製軸部破片(未製品)	鹿角製無鏝
西村正衛・金子浩昌、千葉縣香取郡小見川町白井雷貝塚第2、3次調査、早	大山柏・池上啓介・大給尹、千葉縣一の宮町貝殻貝塚調査報告、史前學雜誌9卷5號一九三七年	〃	〃	〃	〃	〃	平野元三郎、金子浩昌、館山鉦切洞窟千葉縣教育委員會刊一九五八年
早稻田大學考古學研究室	大山史前學研究所舊藏戰災で焼失						上記文献に出土とのみ記す

鈹子市松岸余山(貝塚)	繩文・後・晚期	鹿角製無鏤長さ2.5糎	大教育學部學術研究3號一九五五年岸上鎌吉、日本の有史以前の漁業(英文)東大農學部紀要2卷7號一九一一年	出土のこのみ上記文獻に記す
東葛飾郡沼南村岩井(貝塚)	繩文・後期安行1式	鹿角製外鏤長さ10糎、他に破損品、内鏤のものあり	岸上鎌吉、日本の先史時代の漁業(英文)東大農學部紀要2卷7號、陸前沼津貝塚骨角器圖錄	出土のこのみを上記文獻に記す
茨城県稻敷郡江戸崎町椎塚(貝塚)	繩文・後期	鹿角製外鏤長さ10糎、他に破損品、内鏤のものあり	關東地方繩文式文化遺跡地名表アケオロジ―14號一九五二年	出土のこのみを上記文獻に記す
美浦村大字馬掛字陸平(貝塚)	繩文・前・中後期	鹿角製先曲りの部に刺狀の外鏤あり、長さ8.5糎	江坂輝彌考古學ノート2卷(先史時代Ⅱ繩文文化)一九五七年	出土のこのみを上記文獻に記す
北相馬郡利根町立木(貝塚)	繩文・後期	鹿角製先曲りの部に刺狀の外鏤あり、長さ8.5糎	甲野勇・吉田格、繩文式文化編年圖集第1回花輪台式文化、一九四九年山岡書店刊	出土のこの
早尾花輪台(貝塚)	繩文・早期花輪台式	鹿角製未製品及び軸頭部と先端部を缺いたもの	關東地方繩文式文化遺跡地名表アケオ	出土のこの
土浦市上高津(貝塚)	繩文・中・後	鹿角製未製品及び軸頭部と先端部を缺いたもの	關東地方繩文式文化遺跡地名表アケオ	出土のこの



<p>新治郡桜町旭台(貝塚) 出島村大字岩坪 平(貝塚)</p>	<p>繩文中・後期 繩文・中・後期</p>	<p>鹿角製軸部破片長さ8糎未製品軸部破片</p>	<p>ロジ14號一九五二年</p>	<p>みを上記文獻に記す</p>
<p>新治郡玉里村上田里余部屋(貝塚)</p>	<p>繩文・中・後期</p>	<p>鹿角製軸部破片長さ8糎未製品軸部破片</p>	<p>江坂輝彌・直良信夫、茨城縣野中貝塚調査報告考古學雜誌39卷3、4合併號一九五四年</p>	<p>慶大考古學研究室</p>
<p>東茨城郡小川町野中(貝塚)</p>	<p>繩文・前期花積下層式</p>	<p>軸部破片1長さ5.5糎先端部針先の缺損4.5糎</p>	<p>平野元三郎、金子浩昌、館山鉋切洞窟、千葉縣教育、委員會刊九五八年(志田淳一氏教示資料)</p>	<p>慶大考古學研究室</p>
<p>日立市南高野(貝塚)</p>	<p>繩文・中期</p>	<p>猪牙製鈎針軸部長さ4.5の2點鹿角製結合鈎針、軸部長さ7糎内外先端部外鑿3.5糎内外</p>	<p>渡邊一雄、磐城市の繩文文化時代磐城史跡研究會一九五七年</p>	<p>慶大考古學研究室</p>
<p>福島県磐城市古湊寺脇(貝塚)</p>	<p>繩文・晩期</p>	<p>猪牙製鈎針軸部長さ4.5の2點鹿角製結合鈎針、軸部長さ7糎内外先端部外鑿3.5糎内外</p>	<p>西村正衛、福島縣眞石貝塚の發掘並に其の遺物の考察・史觀第30冊一九四三年</p>	<p>上記報告書には鈎針は未掲</p>
<p>南富岡眞石(貝塚)</p>	<p>繩文・晩期</p>	<p>猪牙製鈎針軸部長さ4.5の2點鹿角製結合鈎針、軸部長さ7糎内外先端部外鑿3.5糎内外</p>	<p>西村正衛、福島縣眞石貝塚の發掘並に其の遺物の考察・史觀第30冊一九四三年</p>	<p>上記報告書には鈎針は未掲</p>

日本石器時代における骨角製鈎針の研究

" " 御代合曹子 (貝塚)	繩文・中・後期	鹿角製外鑱長さ3.3 糎	江坂輝彌考古學ノート2卷(先史時代Ⅱ繩文文化)一九五七年	載、檜野照武氏發掘品
" 平市下高久保ノ作 (洞窟・貝塚)	繩文・後・晚期	鹿角製結合鈎針軸部長さ7.5 糎	日本考古學協會編昭和27年度日本考古學年報	
" " 下大越南作 (貝塚)	繩文・中・後期	鹿角製無鑱長さ6 糎(3 糎破片とも8 點)		
" 相馬郡新地村駒ヶ嶺三貫地 (貝塚)	繩文・後・晚期	鹿角製先端部針先缺損長さ約4 糎		
" " 小川 (貝塚)	繩文・後・晚期	鹿角製内鑱長さ4.6 糎他に結合鈎針先端部		
宮城県伊具郡角田町東根土浮 (貝塚)	繩文・前期上川名・大木1式	外鑱ある大形先端部破片2軸部破片1	宮城縣史1(伊東信雄、宮城縣古代史)一九五七年	
" 桃生郡鳴瀬町宮戸島里浜 (貝塚)	繩文・前・中後・晚期	各種多數	宮城縣史1(一九五七年)岸上鎌吉日本の有史以前の漁業(英文)一九一一年に圖示されたもの	
" 牡鹿郡稻井村沼津	繩文・後・晚期		陸前沼津貝塚骨角器圖錄及び解説	
				上記文献に出土のことのみ記す

(貝塚) 岩手県陸前高田市小友町門前 (貝塚)	期 縄文・後期初 頃(門前式)	鹿角製内鑿長 さ約7 糶鹿角 外鑿3.5 糶錨狀 釣針長さ 3.9 糶	(一九五二年) 岸上鎌吉、日本の有史以前の漁業(英文) 東大農学部紀要2卷7 號一九一一年	慶大考古學研 究室
" " 小友町瀬沢 (貝塚)	期 縄文・後・晚	鹿角製外鑿3 内鑿1 ある長 さ3.6 糶外鑿2 長さ2.5 糶その 他多數出土	岸上鎌吉、日本の有史以前の漁業(英文) 東大農学部紀要2卷7 號一九一一年	
" " 広田町中沢浜 (貝塚)	期 縄文・後・晚	鹿角製内鑿内 外に鑿のある もの、錨形な ど多數	岸上鎌吉、日本の有史以前の漁業(英文) 東大農学部紀要2卷7 號一九一一年	
" 大船渡市末崎町細浦 (貝塚)	期 縄文・後・晚	鹿角製外鑿内 鑿各1 長さ3.6 糶、他に内鑿 3.5 糶	岸上鎌吉、日本の有史以前の漁業(英文) 東大農学部紀要2卷7 號一九一一年	
" " 赤崎町清水 (貝塚)	期 縄文・前・中	鹿角製	日本考古學協會第17回總會研究發表要 旨、西村正衛、岩手縣大船渡市清水及 び長谷堂貝塚一九五六年	早大考古學研 究室
" " 中赤崎大洞	期 縄文・後・晚	鹿角製無鑿の	長谷部言人、陸前大洞貝塚發掘調査所	慶大考古學研

日本石器時代における骨角製釣針の研究

<p>〃 〃 〃        (貝塚)</p>	<p>期</p>	<p>もの、外鐵のもの、内外に鐵あるもの、大、小多數出土、結合釣針も出土</p>	<p>見人類學雜誌40卷10號一九二五年        江坂輝彌、大洞貝塚社教シリーズ第7集、大船渡市教育委員會一九五六年</p>	<p>究室</p>
<p>〃 〃 〃        蛸ノ浦        (貝塚)</p>	<p>繩文・中・後期</p>	<p>鹿角製無鐵</p>	<p>日本考古學協會第21回總會研究發表要旨、西村正衛、岩手縣大船渡市蛸ノ浦貝塚一九五八年</p>	<p>早大考古學研究室</p>
<p>〃 〃        綾里町宮野(貝塚)        〃 〃        宮古市鍛ガ崎町館山        (貝塚)</p>	<p>繩文・晩期        繩文・早期        中・後・晩期</p>	<p>軸部破片長さ4.3        鹿角製無鐵のもの、長さ4.7        纏結合釣針軸部と思われるもの</p>	<p>岸上鎌吉、日本の有史以前の漁業(英文)東大農學部紀要2卷7號一九一一年        大和久震平、能代市柏子所貝塚、能代市教育委員會一九五七年        宮城光次、青森縣是川村一王寺史前時代遺跡發掘調查報告、史前學雜誌2卷6號一九三〇年</p>	<p>秋田星玄鷹巢農高附屬農林博物館</p>
<p>秋田縣能代市柏子所(貝塚)        青森縣八戸市是川一王寺        (貝塚)</p>	<p>繩文・晩期大洞B・雨瀧式        繩文前期圓下B・C式</p>	<p>鹿角製無鐵のもの、長さ4.7        纏結合釣針軸部と思われるもの</p>	<p>宮城光次、青森縣是川村一王寺史前時代遺跡發掘調查報告、史前學雜誌2卷6號一九三〇年</p>	<p>秋田星玄鷹巢農高附屬農林博物館</p>
<p>〃 〃        三戸郡大館村十日市赤御堂        (貝塚)        〃 〃        上北郡六ヶ所村唐貝地</p>	<p>繩文・早期        (赤御堂式)        繩文・早期</p>	<p>結合釣針先端部6個        結合釣針先端</p>	<p>江坂輝彌、三戸郡大館村赤御堂貝塚調査略報、奥南史苑2號一九五七年        日本考古學協會編昭和30年度日本考古</p>	<p>慶大考古學研究室</p>

<p>北海道函館市外亀田郡亀田村 桔梗野サイベ沢 (貝塚)</p> <p>亀田郡尻岸内村恵山 (貝塚)</p>	<p>北海道函館市外亀田郡亀田村 後期</p> <p>續繩文</p>	<p>鹿角製無鏝長 さ約4糎</p> <p>内鏝外鏝ある 鹿角製釣針と 結合釣針</p>	<p>日本考古學協會編昭和24年度日本考古 學年報</p> <p>能發川隆、北海道恵山先史遺物圖集</p>	<p>函館市立博物 館</p>
<p>下北郡田名部町最花 (貝塚)</p> <p>西津軽郡木造町亀ガ岡 (貝塚)</p>	<p>繩文・後期</p> <p>繩文・晚期</p>	<p>鹿角製外鏝2 長さ約8糎</p>	<p>學年報 一九四八年一〇月一日〜七日八幡一郎 氏發掘調査の際發見</p> <p>岸上鎌吉、日本の有史以前の漁業(英 文) 東大農學部紀要2卷7號一九一 一年</p>	<p>函館市立博物 館</p>
<p>虻田郡虻田町入江 (貝塚)</p> <p>有珠郡伊達町若生 ワッカオイ (貝塚)</p>	<p>繩文・前期圓 下C・D式</p> <p>繩文・前期圓 下A・B式</p>	<p>鹿角製釣針軸 部破片1結合 釣針軸部2</p> <p>結合釣針軸部</p>	<p>名取武光、峰山巖、入江貝塚北方文化 報告第一三輯一九五八年</p> <p>名取武光、峰山巖、若生貝塚發掘報告 北方文化研究報告第一二輯一九五八年</p>	<p>北大教養學部 文化人類學研 究室</p>
<p>上坂台地 (貝塚)</p> <p>有珠、沼 (貝塚)</p>	<p>繩文・前期</p> <p>續繩文</p>	<p>結合釣針軸部</p> <p>無鏝軸頭部缺 損</p>	<p>名取武光・峰山巖、北黄金遺跡の發掘 報告伊達町教育委員會刊一九五四年</p>	<p>竹田輝雄氏教 示</p>

追記、朝鮮半島の咸鏡北道慶興郡雄基面松坪洞貝塚から櫛目土器と共に骨製釣針の發見が報告されており、(藤田亮

策 雄基松坪洞石器時代遺蹟の發掘、青丘學叢第二號、一九三〇年）慶尙南道釜山府絕景島東三洞貝塚からも圓底の櫛目土器と共に結合鈎針が發見されている。（横山將三郎 釜山府絕影島東三洞貝塚調査報告 史前學雜誌第5卷第4號 一九三三年）これらの文化は西九州地方に分布する曾畑式土器文化と關連深いものであり、將來曾畑式 轟式 阿高式などの土器を出土の貝塚から骨角製鈎針の出土が予想されると共に、漁撈具としての骨角製鈎針の傳播系路が東北アジア方面にあり、繩文文化初頭に北海道西南部、西九州方面などに傳播、北日本のものは更に西日本、千島などに廣く擴がつたものではないかと考えるが、今後この問題は更に検討を要する問題である。

本稿校正の折り、關係文献が二つ刊行された、いづれも一九五八年八月刊 配本

サイベ澤遺跡

兒玉作衛左門  
大場利夫  
武内收太

——函館郊外桔梗村サイベ澤遺跡發掘報告書 市立函館博物館刊 一九五八年三月

杉原莊介  
芹澤長介

神奈川縣夏島における繩文文化初頭の貝塚 明治大學文學部研究報告 考古學第二册 一九五七年十二月